

大乘戒觀の新建立

西 本 龍 山

一 比丘・菩薩・菩薩比丘

「我常披閱正教、既有菩薩僧・菩薩威儀、亦有一向大・一向小也。今我宗學生、令開大乘戒定慧、永顯小乘下劣行……」（傳教大師全集第五・附錄叡山大師傳三三頁四行）。傳教大師は聲聞僧の外に別に菩薩僧あり、亦小乘三學を宗とする外に別に大乘三學を宗とする寺あり、隨つて小乘戒を奉ずる寺と大乘戒を奉ずる寺とが區別されあるとし、此等に基いて大師の四條式は奏請された。南都六僧統（護命・長慧・施平・豐安・修圓・泰圓）は「大師の奏請は事理詳かならず、法門を紊亂するのみならず、復令條に違ふ」として奏答した。大師は聲聞戒と菩薩戒の二あるを主張して經論中に菩薩比丘の語あり、並に菩薩比丘戒の語あるべきに想到せられなかつた。特に「菩薩比丘」なる語を「菩薩僧」なる語に轉換し、その菩薩僧養成の爲の大乘戒壇院の創設を念とせられた。そこに大師は過失を持たれるのである。大師は南都僧綱に對して、

「我が僧統諸賢は何に因りてか小儀に執して此の萬善戒を混ざるや、自ら損し亦他を損す、寧んぞ後報を畏れざらんや。因果を信ずる（諸）賢ならば頭火を救ふが如く先奏を改易せよ……」（傳全一・二五頁二行）と激してをらる。爾來、日本佛教學徒は悉く大師の主張を肯定し且つ稱讚の辭を奉つてゐる。且つ南都僧統の妨害に依りて遂に大師生前に大乘戒壇院創設の勅許を得ることなかつたとして護命僧統等の奏答を難じてをる。然し大師こそ先奏を改易せらるべきであつた。即ち大乘戒觀の本筋を逸脱してをらるからである。

唐招提寺長老北川智海僧正は「傳教大師の獨菩薩戒の主張は誤まつてをる。日本佛教界は菩薩比丘戒なることを知るべきである」として、大正七年以來「菩薩比丘戒」の宣揚を依囑された。實に非分の依囑であつた。學界また戒律の研究を輕賤し、ひたすら大師の梵網經に依る大乘戒觀を稱揚してをる現狀である。恩師僧正の依囑は誠に百斤の負托であつて遂に今日に至つたのである。

菩薩比丘なる譯語及びその原語の搜尋に多年を要した。智度論卷六(大正二五・一〇七中一三)に引用せる諸法無行經の喜根・勝意の二法師は二菩薩比丘であつた。諸法無行經(宇二・七右一五、同右一九行)には、「爾時有三菩薩比丘一名曰喜根、時爲法師、質直端正……爾時復有比丘法師行菩薩道一名曰勝意……」とある。闍那崛多譯の諸法本無經(宇二・三七右一六、三七左一)には兩法師共に菩薩比丘となつてゐる。菩薩なる比丘、菩薩道を行じてをる比丘、或は比丘形相せる菩薩、又は内秘菩薩行・外現是聲聞の意である。比丘僧伽即ち聲聞僧伽に應同してをる菩薩といふ意味であり、聲聞比丘の持戒持律の行類相貌の外に別に菩薩僧といふ一類の衆があつたと解すべきではない。傳教大師は「比丘の菩薩僧」(傳全一・五七〇頁九行、五七一頁四行)として、比丘の外に別に菩薩僧ありとの證文にしてをられる。これ大師は經文を曲解してをらるる所である。護命僧統等の奏答に智度論卷三十四(大正二五・三一一下九行)の、「諸佛多以聲聞爲僧無別菩薩僧、如彌勒菩薩・文殊師利菩薩等、以釋迦文佛無別菩薩僧」故入聲聞僧中「次第坐」の文を引證してをるのは正しい。智度論卷四(大正二五・八五上、二二行)にも、「問曰、諸菩薩二種、若出家若在家。在家菩薩總說在優婆塞・優婆夷中、出家菩薩總在比丘・比丘尼中、今何以故別說。答曰、雖總在四衆中、應當別說、何以故、是菩薩必墮三四衆中、有

四衆不墮菩薩中、何以故、是人不可發心言我當作佛故」とありて、聲聞比丘の形類相貌の外に別に菩薩僧なる一衆があつたわけではないことを示してをる。夫故に出家の菩薩は悉く毗奈耶通曉の善人であつた。聲聞比丘達の受持せる毗奈耶を卑小なりとして棄捨し、以つて菩薩の威儀別に在りとし、それが大乘なり一乘なりなど誇稱することは其は眞菩薩でもなく、眞の圓頓一乘でも無い。龍樹・無著・天台・荆溪の高風雅操に相應せざるものである。

菩薩比丘なる譯語並にその原語については、法華經常不輕菩薩品(盈一・四左四一八)にも、「爾時有三菩薩比丘一名常不輕……是比丘……」とあり、同梵本(大正大學本三・p. 319, 1. 24)に Sadāparihūto nāma bodhisattvo bhikṣur abhūt とあり、無量壽經梵本第十・十一章にも Dharmākaro bhikṣur bodhisattvo mahāsatvay (法藏比丘菩薩摩訶薩)とあり、西藏本亦同じ。更に法華經化城喻品(盈一・二五左六行)には菩薩沙彌なる語あり、同梵本(大正大學本二・p. 162, 163)にも śrāmaṇero bodhisattvay, śrāmaṇerair bodhisattvair mahāsatvair とありて沙彌菩薩・沙彌菩薩摩訶薩とある。

夫故に大乘經典上、文殊菩薩・彌勒菩薩の如くに單に菩薩とのみありても出家の菩薩なる限り、それは菩薩なる比丘、又は比丘なる菩薩として味讀すべきである。かゝる意味に於て龍樹に對しても吾々は龍樹菩薩と呼び習はしてゐるが龍樹菩

薩比丘又は龍樹比丘菩薩なる意を以て呼ぶべきである。無著・世親に對しても亦同様である。既にして法藏比丘菩薩摩訶薩なる語が構成されてある上より眞宗學關係學僧の律藏に對する再考を促したい。

二 智所讚戒・聖所愛戒と菩薩比丘戒

龍樹の釋論に依り四種の智所讚戒あるを知り得た。一は八聖道分中の正語・正業・正命に、二は梵動經等の戒蘊品の小戒・中戒・大戒を要約した身・口の七種に飲酒及び淨命を加へた八種戒に、三は十善道に、四は傳敎大師によりて棄捨せられた有漏の律儀戒たる二百五十戒及び諸種の戒律行事も無漏道共戒に轉入する因縁ある故に「智者令讚」と言ひて、他の智者達に讚歎せらるる合きであると述べてゐる。即ち人皆が聲聞小乘の戒行なりとして貶しめてをるのを、龍樹は智者所讚の戒行なりとして、大乘行者の堅持すべき戒律なりと稱揚してをる。無著菩薩は瑜伽論に於て此戒を聖所愛戒なりとし、且つ如來の正法を聽受するに先立ちて此の聖所愛戒に安住すべきであると述べてをる。日本は傳敎大師以來今日の學僧等も經・論の二學を偏重して龍樹・無著の戒學に關する本筋の領得に無知である。のみならず、智所讚戒・聖所愛戒の戒名は支那・日本の古來よりの學僧に注意されざりし戒名である。兩論ともに聲聞律藏たる比丘戒（比丘尼の戒を含む）を

稱揚せる戒名である。一は他の聖者達に稱讚せらるる戒、一は聖者自らによりて愛樂^{アイザク}せらるる戒といふ意である。龍樹・無著・世親の菩薩達も十誦律によりて隨行せられつゝ、僧祇律・根本說一切有部律等の諸律藏を愛樂せられたことを證する。

この二つの戒の名稱は阿含經類には「篤信^篤於戒^戒。聖。戒。具足。無有^無三缺^三。漏^漏。無^無諸瑕^諸。隙^隙。亦無^亦三點^三。汚^汚。智者所稱^智。具足善寂^善。」（長阿第六、小緣經、大正一・三七中一六）の如く一連の文中にある語である。その原語推究に隨分困難したがパーリ涅槃經の法鏡說法（第二章第九節 D. II, p. 94, l. 5）によりて確かむるを得た。

……ariya-kantehi sīlehi sammāgato hoti akhaṇḍehi acchidehi asabalehi akammāsehi bhujissehi viññūpasatthehi aparāmetthehi sammādi-saṇvattanikehi.

此文によりて聖所愛戒なる原語は ariya-kanta-sīla であり、智所讚戒なる原語は viññūpasattha-sīla である。智度論はこの連續型の終分なる智所讚戒を以て諸戒を讚揚し、瑜伽論はこの連續型の初分なる聖所愛戒を以て諸戒の根本として瑜伽論全體を貫いてをる。余は茲に聖所愛戒と智所讚戒とを以て瑜伽論と智度論・十住毘婆沙論等の戒觀を代表せしめると共に、兩論が不缺戒・不破戒等の連續型たる古型を其儘に相承しつゝ各々莊嚴なる大乘戒觀を建立せるに驚歎せざるを得ないのである。夫故に傳敎大師によりて貶斥せられ來

れる聲聞律藏そのものが出家人の初門であり、涅槃に到るの初因縁であり、沙門の禮法であり、初地以上の阿毗跋致菩薩の行類相貌の一端なるを學知するを得た。而して出家の菩薩たる限り迹を聲聞に混じて比丘行相を示現せるものは眞菩薩であり、正しく菩薩比丘と呼びまつるべきであることを提唱したい。小乘聲聞比丘の行相なりとして排斥せられる處に傳教大師の誤謬がある。顯戒論に示されたる明據なるものも

過誤に満ちてをる。「小大優劣は天と地との如し」とか、大道と小徑、大海と牛跡、日光と螢火に比して、「誰の有智の者か小律儀を執せんや」として南都戒壇院にて受得せられたる戒體を放棄し、梵網十重四十八輕戒を以て菩薩大僧戒とし、是戒を受得する爲の大乗戒壇院創設に心血を注がれた。それは有智者の所爲ではあらうが、大有智者の所言では無いのである。

新刊紹介 3

舟橋一哉「業の研究」

前編 業の研究

第一章 阿含に顯はれたる業論

第二章 部派佛教に於ける業論

後編 梵藏所傳の史料よりする俱舍論業品の註釋的研究

附錄 三世實有說の一考察

索引

(A 5 三九〇頁 法藏館)

西義雄「原始佛教に於ける般若の研究」

序論 原始佛教資料の再檢討

本論 第一編 原始佛教に於ける「般若」の研究

第二編 心性本淨說とその傳承

第三編 原始佛教經典に於ける重要教義と般若との關係

索引

(A 5 五六四頁 大倉山文化科學研究所)